

マルコ 14 章 3～9 節 「注がれた愛」

未信の方々はクリスチャンたちを見て、どうしてそんなに熱心になるのだろう、その時間や労力やお金を、他のことに使えばいいのに、もったいない、と思っているかもしれません。そして、そのように熱心に行くことで救いを得ようと頑張っているのだ、と思うかもしれません。しかし、それは違います。逆なのです。イエス・キリストによる救いをいただいたので、感謝して、喜んで、献げているのです。そして、そのように神に応答して生きることができるのも、神の恵みなのです。

1. マリアの行為と弟子たちの非難（：3～5）

過越の祭りが行われる週になり、イエス様と弟子たちも過越の祭りに合わせてエルサレムにやって来ました。その週の初めの日に、イエス様はろばの子に乗ってエルサレムに入り、人々は「ホサナ」、「私たちをお救いください」と叫んで迎えました。ローマ帝国の支配から解放してユダヤの国を再興してくれるメシアへの期待を群衆はイエス様に向けていました。

その一方で、ユダヤの宗教指導者たちはイエスに対する敵意を増し、殺意を募らせていました。彼らはイエスを捕らえ、殺すための方法を探していました。

そういう中で、群衆や指導者たちとは対照的に、主イエス様が向かわれるところを正しく受け止め、主に喜ばれる行動をした一人の女性がいました。その女性の行動と彼女に対するイエス様の賞賛がこの箇所に記載されています。

イエス様たちは、昼間はエルサレムの町に入り、夜はベタニヤという近くの村に出て行って過ごしていました。イエス様たちが食事をしていると、一人の女性が「純粋で非常に高価なナルド油の入った壺」を持ってやって来ました。ここには名前は記されていませんが、ヨハネの福音書を見ると、同じベタニヤに住むマルタ、マリア、ラザロの兄弟もそこにいて、香油の壺を持って来たのはマリアであったことが分かります。彼女はイエス様に近づき、その壺を割って、香油をイエス様の頭に注ぎました。大事に持っていた香油を、彼女はイエス様に対してすべて注いだのです。

その彼女の行為にその場にいた人々は驚きました。それだけでなく、彼女のことを責め始めました。注がれた香油の価値を見積もり、「この香油なら、三百デナリ以上に売れ」と言っています。三百デナリとは、当時の労働者の年収くらいの金額です。そんな高価なものをここですべて使いきったのです。憤慨した者たちとは、他の福音書を見ると、イエス様の弟子たちだったことが分かります。「何のために、香油をこんなに無駄にしたのか。この香油なら、三百デナリ以上に売れて、貧しい人たちに施しができたのに」。

このことばだけを取り上げれば正論です。けれども、弟子たちの間に検閲的な態度が見られます。この女の人には自分の持っていたナルドの香油をどのように使うこともできました。非難される筋合いはないのです。そして、憤慨している弟子たちは、貧しい人たちを助けようとする気持ちがあれば、自分たちが犠牲を払って、行うことができるはずですが、ところが、この女の人の犠牲、他人の香油を売ることで、貧しい人たちへの支援のことを論じているのです。

私たちの内にも、他の人の信仰に基づく行動を、自分に関わろうとしないのに、批判することがないでしょうか。あるいは逆に、そのような批判を恐れて、行動を控えてしまうことがないでしょうか。

2. イエスの賞賛（：6～9）

弟子たちがマリアの行為を非難した一方で、イエス様はどうしたのでしょうか。イエス様はマリアが香油をご自分に注ぐことを黙って受けていました。そして、弟子たちが彼女を非難すると、それを止めさせ、マリアの行為を賞賛しました。6～9 節。

どうしてイエス様は、このマリアの行為をこれほどまでに賞賛したのでしょうか。第一に、マリアが惜しまずに主のために献げたからです。その香油はマリアにとって大切な宝物だったことでしょう。それをイエス様のために惜しげもなく献げました。壺を割って、一気にすべて注いだのです。彼女は弟子たちのように、これを売ったらいくらになるかという計算はしませんでした。もったいないとか、これだけのことをすればどんな

報いがあるだろうという打算はありませんでした。イエス様のためという一心で行ったのです。

そのマリアの思いには、おそらく弟ラザロがイエス様によっていのちを救われたことの感謝があったと思います。どのようにして感謝を表したら良いか考えて、自分にできる最高のものを主に献げたのでしょう。「彼女は、自分にできることをしたのです」とイエス様は言われました。自分にできる最高の感謝と奉仕を献げたことを、イエス様はお喜びになったのです。

第二に、イエス様が賞賛したのは、マリアが機会を逃さなかったからです。ここでイエス様はご自分の死が近づいていることを改めて示されました。「埋葬に備えて、わたしのからだに、前もって香油を塗ってくれました」と言っています。香油は遺体を墓に葬るときにも使いました。弟子たちは、イエス様に迫っているその時を理解していなかったので、いつでもできる貧しい人々への施しのことを考えました。しかし、マリアはイエス様に死が迫っていることを察して、この時しかない、大切にしていた香油を思い切って献げたのです。これが神のなさることの時にかなっていたので、イエス様はお喜びになったのです。

どうして彼女はイエス様の死を察することができたのでしょうか。それはそれほど難しいことではなく、イエス様はこれまで何度もご自身の受難について弟子たちに告げてこられました。弟子たちは受け止めていませんでしたが、彼女はそれを聞いて受け止めていたということです。マリアは、イエス様が自分の家に来られた時には、イエス様のそばでそのことばを聞いていることを選び取りました。そのように主のみことばをよく聞く中で、受難の予告を聞き、イエス様の死が近づいていることを悟り、自分にできる精一杯のことをしたいと思ったのでしょうか。そして、埋葬の備えとして香油をイエス様に注いだのです。

イエス様はすべての人の贖いとなるために十字架に向かわれました。ご自分のいのちを献げようとしているイエス様のことばを聞いて、マリアは自分もイエス様に招かれている恵みを感謝し、恵みに応えて自分も献げたいと願い、ナルド油を注いだのです。そのように、イエス様の恵みによって私たちのささげ物は引き出されてくるのです。

第三に、イエス様が賞賛したのは、マリアの行ったことによってイエス様がどのようなお方であるかが表されているからです。マリアが香油を注いだことはイエス様の葬り、死を表していました。そして、もう一つのこと、イエス様が救い主であることを表していました。旧約聖書で預言されていた救い主、メシアということばは「油注がれた者」という意味です。イエス様がマリアによって香油を注がれたことにはその二重の意味がありました。つまり、イエス様こそ十字架で死なれた救い主・キリストであるという福音の中心が示されているのです。ですから、世界中どこでも福音が宣べ伝えられるところでは、マリアのしたことも、記念として語られることになるのです。

ラザロを生き返らせてくださり、また、「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです」と宣言されるこの方こそ救い主であるとマリアは信じていたのでしょうか。そのイエス様のために、自分にできる最高のものを献げたことが、その信仰を証ししていました。さらに、救い主イエス様のために、私たちがなすべき応答の模範を示していたのです。

この女の人がイエス様に香油を注いだことは、人の目から見れば無駄なことでした。同じように、神が御子をこの世に与え、人となられた御子イエス様の身代わりの死によって、人を罪から救う道を用意されたことも、見方によっては無駄なことでしょう。しかし、それゆえに、救いのみわざが成し遂げられました。

そして、救いのみわざは進められています。救い主イエス様がいのちをかけて成し遂げ、招いてくださって、救いを受け取った人々は、マリアのように主のために惜しまずに自分を献げます。主イエス様の献身の姿に応えた人々の献身によって、福音はこれまで宣べ伝えられてきて、今、一人ひとりの前に差し出されています。

救い主イエス様がいのちを捨てて表してくださった神の愛を、ぜひ受け止めていただきたいのです。そして、救いをいただいたなら、注ぎ尽くされた主イエス様の愛を受けて、私たちも主イエス様のために愛を注いでいきましょう。主の恵みによって引き出されて、私たちも自分にできる最善を献げるようになります。主のために惜しまずに献げ、主の時を逃さずに献げ、救い主イエス様を証ししていきましょう。それぞれに主から与えられている時間を用い、能力を用い、財を用いて、主に仕え、主に愛を注ぐ行いができるように祈りましょう。